

琉球大学学術リポジトリ

児童と児童・児童と教師の関係づくりの工夫
ー自他理解と「勇気づけ」を通してー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 網敷, 藤代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019869

児童と児童・児童と教師の関係づくりの工夫

— 自他理解と「勇気づけ」を通して —

Exploring of creating relationships among Children-Children and Children -Teacher:
Focus on Children self-other understanding and Teachers' encouragement.

網敷 藤代

Fujiyo AMISHIKI

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・南城市立船越小学校

1. 研究テーマ設定理由

文部科学省から出された「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」によると、2021年度に全国の暴力行為発生件数は過去2番目、いじめ認知件数及び不登校児童生徒数は過去最多になっており、沖縄県も同様の傾向が見られる。児童生徒の課題の背景には、個人的要因、家庭的要因、人間関係に関する要因など、様々な要因が絡んでいる。

生徒指導提要（文部科学省 2022）には、いじめ重大事態や暴力行為の増加、自殺の増加などの喫緊の課題に対し、起きてからより事前に日常的に行われる自己理解力や他者理解力、協働性などの「発達支持的生徒指導」が重要だと記載されている。また、楠・丹野（2022）は「子どもは自分の感情を受容され、安心感を与えられるだけでなく、仲間集団から承認、肯定され、自己肯定感を育てていくことが重要である」と述べている。

子どもはそれぞれの家庭環境の中で育ち多様な考えを持っている。その子どもたちがお互いに認め合い、協調性を持ち共に行動するにはどうしたら良いだろうか。國分（2018）は「あるがままの自分に気づき、他者にオープンにする。それを受けて他者も自分の内界をオープンにする。そしてお互いの世界を共有する。このエンカウンター体験が自他発見をさらに促進する」と述べている。このことから、構成的グループエンカウンター（以下、「SGE」）で他者理解や自己理解、リレーション（ふれあい）づくりを意識した取組をすることで、児童の関係づくりの支援を行っていきたいと考える。また、野田（2017）は「健康に、建設的に暮らしていこうというときに、絶対必要な要素は周囲からの『勇気づけ』だ」と述べている。筆者も児童に「勇気づけ」で接し、元気づける事で自分も相手も大切にできる児童の育成を図りたいと考える。

以上のことから、自他理解や「勇気づけ」を通して、他者と協同して課題を解決できるような児童の育成と学級環境の改善を図りたいと考え本テーマを設定した。

2. 研究の目的

学級で児童に寄り添い、自他理解を意識した授業づくりや学級経営、児童理解をもとに「勇気づけ」を行うことで、児童と児童・児童と教師のよりよい関係づくりの変容を検証することを目的とする。

3. 研究内容

(1) 人間関係形成

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別活動編には、「『人間関係形成』に必要な資質・能力は集団の中において、個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられる。年齢や性別といった属性、考え方や関心、意見の違い等を理解した上で認め合い、互いのよさを生かすよう

な関係を作る事が大切である。」と記載されており、筆者はこれに相手の話を聞いたり話したりすること等を加え、人間関係形成と捉える。

(2) 児童の発達を支える指導の充実

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編では、「学習や生活の基盤として、教師と児童との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること。また、主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の児童の多様な実態を踏まえ一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方により児童の発達を支援すること」と述べている。

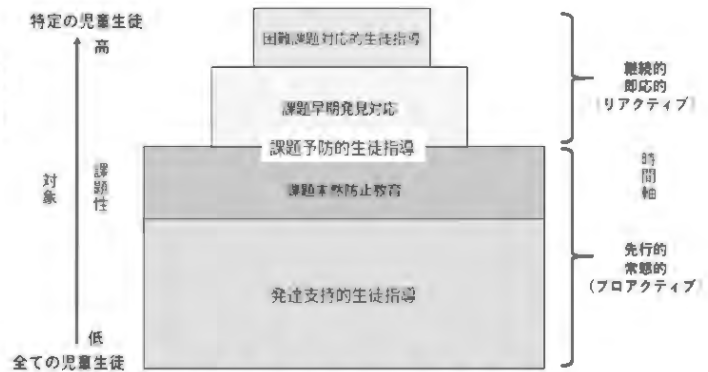


図1 生徒指導の重層的支援構造

と述べている。生徒指導提要にも両方の大切さが示されており（図1）、児童が学級の中で人間関係をより良く形成していけるよう個人と集団の両面及び発達支持的生徒指導を意識して取り組みたいと考える。

(3) 自他理解とアレンジしたエンカウンター

片野（2009）は、自己理解は「他者が知っている自分自身に気づくこと」、他者理解にとって必要な事は「他者を理解しようという、他者に対して無条件の積極的関心を示す反応や理解の態度である」と述べている。また、國分（2018）は「SGE は本音と本音の交流をすることによって自己疎外からの脱却をねらうものであり、自分の原点に戻るのを援助するグループ体験である。その本質の第一は、自己発見と他者理解にいたる事、第二は、感情の変容、第三は、新しい行動を身につける事である」と述べている。さらに「SGE の文化（風土）は、非審判的・許容的雰囲気であるが、これはロジャーズ理論の『受容』という概念に負っている」と述べている。このことから筆者は、自分の思った事、感じた事の本音を語り合い、お互いを知り合うことでリレーションができ安心感が生まれる。そして、安心感が人間関係につながると考える。SGE にソーシャルスキル教育（以下、「SST」）やアサーション教育も含まれるため必要に応じて指導し、学級の実態に合わせてアレンジしたSGE で自他理解を深めていきたい。河村（2007）は、SSTとは「対人関係を営む知識と技術のことである」、平木（2020）は、アサーションとは「自分も相手も大切にしようとする自己表現のこと」と述べている。

(4) リレーションについて

リレーションとは、互いに構えないふれあいのある本音の感情交流であり、相手に対して心が開かれていて信頼関係があることである。リレーションの中身は2つあり、ポジティブな感情交流とネガティブな感情交流である。ラポールとはポジティブな感情交流の時だけに用いラポールはリレーション形成の導入である。児童に接する際、リレーションの3段階を意識して取り組むようにした（図2）。

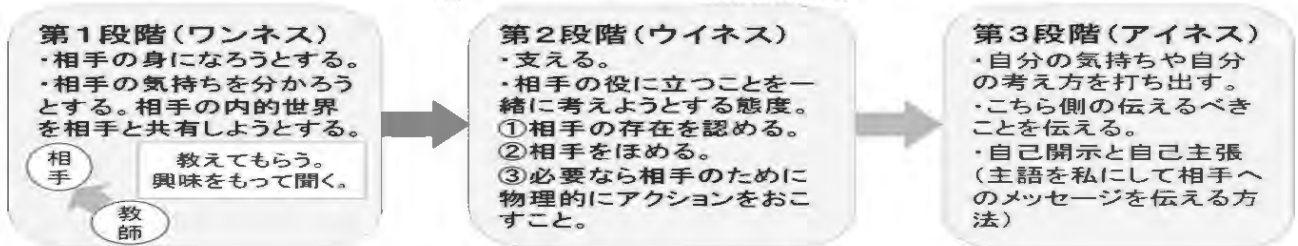


図2 リレーションの3段階

(5) 「勇気づけ」と児童理解

「勇気づけ」とは、アドラー心理学で対人支援における理論・技法のことで、自分自身や他者に「困難を克服する活力を与えること」である。野田（2017）は「不適切な行動の根本原因は勇気を失っている」と述べている。

ることだ。だから、勇気づけなければならない」と述べている。筆者は「勇気づけ」の言葉かけ（貢献に注目・過程を重視・成果を指摘・失敗を受け入れ・成長を重視・判断を委ね・肯定的に表現・私メッセージ・意見言葉・感謝と共感）を取り入れ（表1）、大人が子どもへの対応の仕方を見直し「好ましい行動を認める」ことに目を向け、日々の児童の行動を肯定的に捉え支援にあたりたい。それにより児童と教師の関係作りにつなげたい。横川（2009）は「その人の持っている世界を認めるところから出発する」「自分の思いを言語化することで、きれったり爆発したりしなくてもすむようになる」と述べている。学校でも一人一人の児童

表1 勇気づけの言葉かけ

童理解に努め、弱さも認め受け入れることが今後ますます必要となり求められていくと考える。個々の児童理解を行ったうえで、児童に合わせた「勇気づけ」を行っていききたい。

注目ポイント	表現例
1. 貢献・協力に注目	助かるよ・ありがとう・いいね・うれしいよ・優しいね
2. 努力・過程に注目	がんばったね・努力したね・努力家だね・粘り強いね
3. できていることに注目	ここはいいね・ここまではできたね・どうやってやったの？
4. 失敗も受け入れる	残念だったね・失敗からも学べるよ・次はどうしたい？
5. 個人の成長重視	前より成長したと思うよ・どうやってやったの？
6. 自己評価させる	良かった事や改善点は？・次の目標は？
7. 肯定的側面に注目	慎重だね・元気がある・感受性が鋭い・行動力が活かせるね

4. 研究対象

- (1) 公立小学校2年生 34名
- (2) 気になる児童（対象児Aさん・Bさん・Cさん）

5. 研究方法

- (1) 授業実践（SGEの学級活動や道徳や国語）を行う事により、児童の関心に意識の変容がみられたかを、授業及び日々の観察と児童の振り返りシート、アンケート（事前・事後）、QUTテストにより分析する。
- (2) 教師が「勇気づけ」を行うことにより、気になる児童（対象児Aさん・Bさん・Cさん）の行動にどのような変容がみられたかをまとめ分析する。

6. 学級全体に向けての取り組みと結果と考察

(1) 学級の実態と研究授業の実践例

4月に行った事前アンケートや学級の様子から、本学級の児童は、聞いたり話したりすることが苦手な自己肯定感も低く、友だちの人数も少ない傾向にあることが分かった。その対策として「話の聞き方」や「友だちの誘い方」などのSSTや、自分と友だちの良い所を認めるなどのSGEの授業を行い、児童の自他理解を促進し人間関係づくりにつなげたいと考えた（表2）。その際、互いの思いを交流するシェアリングも大事にした。また、道徳で友だちの在り方について考えさせた。

表2 研究授業の実践例

学活「なかまのさそいかた」	道徳「森のともだち」	学活「自分のいいとこさがし」
		
めあて：友達を誘い応答するためのス	めあて：友だちと仲よく助けあって	めあて：自分のよさや頑張りに気付

キルを練習する事に加え実際に誰にでも声をかけられるような練習を重視する。	いこうとする態度を育てる。	き、自信につなげる。
児童の振り返り：友達をさそえたからとても嬉しかった。もっといっぱい友達を誘ってみたい。また、この「いっしょにあそぼうゲーム」をやってみたい。	児童の振り返り：最初、自分は意地悪な人は助けに行きたくなかったけど、大声で泣くなら助けないと、友だちが大変な時は助けに行かないとだめじゃないかと思いました。	児童の振り返り：最初は、自分の良いことを見つけることができなかったけど、ヒントカードを見てそれを写したりヒントカードから思いついたことをかいて良かったと思った。

学活「仲間の誘い方」の授業で、Dさんは「友達を誘ったら嬉しかったです。誘ったのはEさんです」と振り返った。授業の後、Dさんは実際に朝、Eさんを「学校と一緒にいこう」と誘いに行き、「家が近いから迎えに行ったよ」と一緒に登校してきた。それまで、あまり遊びに入らなかったEさんだが、休み時間に「いっしょにあそぼう」と友だちに声をかけ仲良く遊ぶようになった。他の児童も友達に「あそぼう」と声をかけることが多くなった。これらのことから「一緒にあそぼう」「いいよ」の応答練習は効果があったと考える。「自分のいいとこさがし」の授業では、「自分には良い所がいっぱいあると気付いた」「良い所を探したら、心が気持ちいい、頑張る気持ち、勇気が出る気持ちになった」と振り返りがあった。この学習が自己肯定感を高めることにつながって欲しいと考える。「楽しい夏休みビンゴ」の学習では、夏休みにやった事を友達に聞いて名前を書いてもらい、いくつビンゴになるかを競った。そこで「みんな違う事をやっていると気づきました」という児童の振り返りがあった。「ねえ、どっちがいい」の学習では、「ジュースとアイスクリーム」「愛とお金」「生まれ変わったら男と女」どっちがいいかを理由も一緒に考えさせた。児童から「友達は自分と気持ちが違うと分かった」「自分はこんなことを思っていたんだなと思った」という意見があった。自分自身の考えに気づき、他者との違いに気付くことができつつあるようだ。

いろいろな学習を行うことにより、7月に行った「学校生活アンケート」結果から次のような変容がみられた。「学校に行くのは楽しいと思いますか」「クラスの中にあなたが困った時、助けてくれる人がいると思いますか」「自分や友だちにはよいところがあると思いますか」の問いに対し4件法で回答を求め、t検定の5%水準で有意差がみられた。これらの結果から今回の取組は一定の効果があったと考えられる。しかし、「思った事を話す事はできますか」では有意差がみられなかった。自分の思いを表現することは関係づくりの上で大切なことなので対策をとる必要があると考えた。そのため、国語の物語文「ニャーゴ」で自分なりの考えを持つ時間を設定し、自分の考えを発表したり、友だちの意見を聞き交流したりする取り組みを行った。また、劇化することで、登場人物のねこや子ねずみの気持ちになり、他者理解を促したいと考えた。ねこ役の児童は「ももをくれた優しい子ねずみにありがとうと思った」、子ねずみ役の児童は「ニャーゴと遊んで楽しかったからまた遊びたいと思った」と役になりきって気持ちを表現した(図3)。



図3 劇「ニャーゴ」

(2) 研究授業と学級経営の月別実践内容

児童をアセスメントしながら、学級の実態に合わせて研究授業や学級経営を行ってきた。実際に行った月別の実践内容は表3の通りである。

表3 研究授業と学級経営の月別実践内容

月	4月	5月	6月	7月	9月	10月
	①学級活動 「仲良くな	①学級活動 「元気の出る	①学級活動 「仲間の誘い	①学級活動 「自分への	①学級活動 「たのしかった夏休	①学級活動 「自分の良いとこ

研究授業の実践内容	ろう」 「質問じゃんけん」(SGE) ②道徳 「くまくんの宝物」	聞き方」(SST) 「友だちの良い所探し」(SGE) 「思いやりのある言葉や態度」(SST)	方」(SST) 「自分の怒りを上手に落ち着けよう」(SST) 「深呼吸して、1・2・3」(SST) ②道徳 「有り難う、りょうたさん」	手紙」(SGE) ②道徳 「友だちやもんな、ぼくら」	みビンゴ」(SGE) 「挨拶」(SST) 「3つの話し方」 「ていねいに、やさしく」(SST) ②道徳 「森のともだち」 ③国語 「ニャーゴ」	さがし」(SGE) ②朝の会： ショートエンカウンター」(SGE) 「ねえ、どっちがいい」「セブン・イレブン」「何でもバスケット」「4つの窓」
留意点	①教師の自己開示とゲームにより緊張感をほぐしリレーションをつくる。 ②温かい心で接し、親切にしようとする態度を育てる。	①聞き方は集団生活する上で基本的なスキルであることを明確にし体験させる。 ②友だちの良い所を探し他者を肯定的に受け入れる事が出来るようにさせる。(他者理解)	①友だちを誘うためのスキルを練習させる。 ②怒りへの対応。 ③自分の特徴に気づき良い所を大切にしようとする心情を育てる。(自己理解)	①自分の努力していることに気づき、自分自身で誉めることの楽しさを味わわせる。(自己理解) ②友だちの良さに気づき助け合う心情を育てる。	①夏休みの思い出から、多様性を理解させる。(他者理解) ②学期始めにあいさつの大切さを確認する。 ③アサーションで自分も相手も大切にしたい。(自己理解) ④国語の物語文を自分なりに読み取り劇化する。(自己理解)	①自分のよさや頑張りに気づき、自信につなげる。(自己理解) ②朝の会で週に一回ショートエンカウンターを行い、楽しくふれあうようにさせた。(自己理解)
学級経営	①学級通信(毎月発行) ②遠足(一人一行事担当)	③友だちの良い所見つけ(昼の会で発表) ④読み聞かせ(担任・毎週)	⑤川柳(毎月掲示) ⑥レク(一人一行事担当・毎週)	⑦1学期のお楽しみ会「自慢大会」(一人一行事担当)	⑧社会見学(一人一行事担当)	⑨運動会(一人一行事担当)

(3) 研究の結果と考察 (学級全体)

①「お友だちアンケート」について

「お友だちアンケート」の結果から、「クラスに仲の良い友だちがいる」と答えた児童は4月(72%)から10月(97%)に増えた。友だちの人数も、4月(一人当たり2.7人)から10月(一人当たり11.2人)と約4.1倍に増えた。学級活動では「仲間の誘い方」の授業を行ったので友達に声をかけやすくなったという声があった。休み時間は、クラスの仲間に「一緒に遊ぼう」と誘ったり、「入れて」と自分から声をかけたりし「いいよ」と応答して一緒に遊ぶ様子がみられた。このことも友達が増えた要因の一つだと考える。

②「学校生活アンケート」について

「学校生活アンケート」の結果から、「学校に行くのは楽しい、どちらかといえば楽しい」と答えた児童は、4月(64%)から10月(91%)に27ポイント増えた。「クラスの中に、あなたが困ったとき、助けてくれる人がいる、どちらかといえばいると思う」答えた児童は、4月(57%)から10月(75%)に18ポイント増えた。「友達にはよいところがある、どちらかといえばある」と答えた児童は4月(86%)から10月(100%)になった。「自分にはよいところがあると、どちらかといえばある」と答えた児童は4月(57%)から10月(97%)に40ポイント増えた。道徳の授業で友達について考え、学活のSSTで挨拶や話の聞き方など人との関わり方の基本を学んだ。また、SGEで友達や自分について良い所を見つけたり、一緒にゲームでふれあったりすることで自己理解が深まり友達関係が広がったと考える。

③教師による「勇気づけ」について

教師による「勇気づけ」の声かけも子ども達に伝わりつつあるように感じる。「先生が自分のことを励まして(勇気づけて)くれる」と答えた児童は4月(31%)から10月(72%)と約2.3倍に増えた。「先生はなんと行って励ましてくれますか」の問いで、児童が受けとめた一人当たりの言葉数は4月(一人当たり3.8個)から10月(一人当たり10個)と約2.6倍に増えた。筆者は児童の思いを聞き、リレーションの1・2・3段階に気をつけながら児童と関わるよう心がけてきた。その際できるだけ勇気づけの言葉かけをし、児童が安心して物事に取り組めるよう意識した。教師の言葉かけは、児童との人間関

係に深く関わっていると考える。

④「QUテスト」について

本学級は学級満足度尺度において、「学級生活満足群」が4月24%から10月76%に増加した。10月の結果を全国的な傾向と比較すると、承認得点は全体的に高く、殆どの児童が先生や友だちから認められて学級生活に充実感を獲得している。また、非侵害得点は全体的に低く、学級のルールや行動規範が殆どの子ども達に共有されていると想定される。このような、ルールが定着している学級集団の中で、子ども同士の間関係も親和的に形成されており学級全体に前向きに活動しようとする気持ちが高まっていると思われる。しかし、一部の児童は個別対応に留意が必要である。

7. 気になる児童（Aさん・Bさん・Cさん）への取り組みと結果と考察

(1) 教師による働きかけと児童の変容

4月当初、自信のない児童や話し続ける児童、友だちとトラブルを起こす児童が多かった。学級の様子を見ながら、気になる児童3名（支援が必要な児童Aさん・ある程度支援が必要な児童Bさん・通常の児童Cさん）を設定した。学級全体や個別に「勇気づけ」の言葉かけをし支援を行った。指導の過程でリレーションは1段階から3段階の間を変化した。表4に☆教師の姿勢 ①教師によるリレーション 勇教師による勇気づけの言葉かけ ④③②気になる児童の様子 ■友だちから見た変容を表示する。

表4 教師による「リレーションの3段階の働きかけ」と「勇気づけ」と児童の変容

段階	①支援が必要な児童 (対象児Aさん)	②ある程度支援が必要な児童 (対象児Bさん)	③通常の児童 (対象児Cさん)
	④授業中に教室から度々とびだすことがあった。身の回りの片付けができず、授業中もおしゃべりが止まらない。1年生の頃、友だちを言葉で傷つけることがあった。	④授業中、椅子の上に足を置き机に身体をのせていた。上履きは履かず椅子の近くに散乱。普段、情緒が安定してあまり感情の起伏はないが、ちょっとした出されたときのスルースキルがなく感情的に向かっていることがある。昨年度、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症と診断。	④明るく元気で授業にも取り組んでいる。休み時間は友達とも遊んでいるがアンケートに「自分は良い所がない」と答えている。自己肯定感が低いことと、授業中、授業に参加せず絵を描くことがあり気になる。休み時間、しくしく泣くことがあった。
リ レ ー シ ョ ン の 1 段 階	☆教師は相手の気持ちを分かろうとする。 ④授業中、教室から飛び出す。 勇チャイムで席に着くことができていることをほめる。 ④SCに対応を相談し、A児に教室からいなくなることを心配すること、教室が居場所だと言う事を伝える。 ④教室から出なくなった。しかし、授業中はハサミで絵や消しゴムを切りノートは書かない。	☆教師は相手の気持ちを分かろうとする。 ④友達からちょっとした出され度々トラブルになる。感情的に向かっていることがあった。 ④お互いの話を聞き事実確認後、どうしたらよかったか話し合い謝罪させた。 勇トラブルのあった相手Iさんにハサミを貸し、算数を教えてあげるBさんの優しさをほめた。相手にBさんへお礼を言うよう促した。 ④それからIさんとのトラブルが少なくなってきた。	☆教師は相手の気持ちを分かろうとする。 ④授業中絵を描くことが多い。 ④お絵かき係なので、作品を展示するコーナーを設けると描いた絵を何枚も貼った。 勇絵が上手いねとほめ、皆もみてねとクラスに呼びかけた。 ④少し照れくさそうにした。 ④休み時間は友達と一輪車に乗って遊ぶ様子が見られた。 ④「あいさつ」の学習をしてから、笑顔で元気に挨拶するようになった。 勇「気持ちいい挨拶だね」と言うときにこにこしていた。
4 ・ 5 月	④休み時間は友達と遊ぶ様子はあまり見られない。1年生の先生の所か、1人でどこかへ行く。 ④Aさんが高学年の兄を待つ放課後、筆者と一緒に遊ぶようにした。		
リ レ ー シ ョ ン の 2 段 階	☆教師は相手の存在を認め、ほめる。相手のためにアクションをおこす。 ④クラスでGさんとHさんのトラブルを皆で話し合った際、Aさんが「いじめられる人は俺が殴る。俺のお父さんも子どもの頃いじめられたって。俺だって幼稚園の時いじめられた。いじめられている人がいたら俺が守る」と話し皆の考えを深めた。 勇「Aさん、正直に話してくれてありがとう。辛いことがあったんだね。辛いとき自分の見方がいると元気にな	☆教師は相手の存在を認め、ほめる。相手のためにアクションをおこす。 勇「友だちの良い所みつけ」の授業の導入で「誰でしょうクイズ」をお手紙形式で書きBさんにプレゼントした。保護者から「有り難うございます。Aはとても喜んで家で何度も読んで私達に聞かせてくれました」と連絡があった。 ④席替えて仲の良いFさんと隣にした。 ④同じお誕生日係でもあり、給食後	☆教師は相手の存在を認め、ほめる。相手のためにアクションをおこす。 ④絵を描いてクラスの皆と筆者にプレゼントしてくれた。 勇ありがとう。先生も嬉しいよ。きっと、皆も嬉しいと思うよと言うと、ニコツとした。 ④しくしく泣いているので「どうしたの」と聞くと、「隣の席のJさんにひじ鉄砲をやられた」という理由を聞くと「変態」と言ったから

6 ・ 7 月	れる。これからも困っている人を助けてあげてね」と話した。乱暴な所もあるが心優しい一面を見ることができた。 ①個人面談でお母さんから「1年生の時級友を押しピンで刺す」と脅した事があると話があった。	一緒にプレゼントする予定の絵を丁寧に描いている。 ②学活「一緒にあそぼ!」の振り返りで「友達の誘い方がわかった」と書いていた。休み時間は友達を「遊ぼう」と誘い、「入れて」と自分から声をかける様子が見られるようになった。	だそう。手を出す方が悪いが「変態」と言われると相手も嫌な気持ちになることを話した。 ③個人面談でお母さんが「4月に泣いたのは、友達とクラスが離れて寂しかったそうです。気にするなと言いました。この子は何でも話してくれます」と話していた。
リ レ ー シ ョ ン の 3 段 階 9 ・ 10 月	☆教師はこちら側の伝えるべきことを伝える。 ④友達のIさんがBさんにボールを当てられたと言い、Aさんが怒ってBさんに文句を言い続けてトラブルになった。 ⑤事実確認すると、IさんがBさんのボールを取ったので怒ってしたことだった。Aさんは事情が分からず熱くなりトラブルを起こすことが時々ある。手を出さなかったのは良かったが、今後は理由を確認するよう話した。 ⑥この頃側転に興味を示し、朝「先生、見て。俺、3回できるよ!」と言い帰りに「5回できたよ。見て!」と嬉しそうである。 ⑦手で安定して回転出来ていることをほめると嬉しそうにしていた。	☆教師はこちら側の伝えるべきことを伝える。 ⑧保護者からの申し出で個人面談を行った。学校で出来ていることと出来ていないことを知らせ、家庭での様子を伺った。児童のことを一番理解しているのは保護者である。連携は大切だと改めて実感した。 ⑨「先生、漢字のテスト結果が気になって算数テストができない」と言う。 ⑩「Bさんは百点だよ。大丈夫」と言うと言った。向かえた。始めてヘルプを出すことができ、応答関係ができつつある。 ⑪Aさんが縄をミミズと言って遊んでいると、「ちがう。縄だ」と繰り返して「ばかか」と言いトラブルになった。 ⑫筆者が「Aさんは遊んでいるだけだよ」と言うと理解できトラブルは治まった。	☆教師はこちら側の伝えるべきことを伝える。 ⑬2学期始めの2年生代表の挨拶をしてみないかと声をかけたら「やってみる!」と答えた。自分の思いを言葉で表し、やったら出来るという自信を持って欲しいと考えた。将来、絵を描く仕事に就きたいと発表した。 ⑭上手に読めたね。夢に向かって頑張ってるね」と励ました。お母さんに代表挨拶と、友達と一緒に植えた花の水かけを頑張っていることを伝えると喜んでくれた。 ⑮ポイント制を考案し、がんばったクラスの友達がポイントをためると絵を描いてプレゼントした。他の友達が一緒に手伝いたいと言うと「いいよ」と言って絵の描き方を教えていた。 ⑯「アイデアマンだね」というと嬉しそうにしていた。
友 達 か ら み た 変 容	■優しくなってきた。前は人に悪口言ってたけど、今は言わなくなってきた。 ■だんだん優しくなってきた。「大丈夫?」って言ってくれる。 ■家でいつも遊ぼうと言ってくれる。 ■友達とサッカーボールや鉄棒で遊んでいる。	■友達とよく話すから仲良くなってきている。 ■お願い事をいっぱいしてくれる。例えば、「いっしょにあそぼう」とか「鬼ごっこしていい?」とか言うようになってきている。	■何にも言っていないのに、Cさんが絵をかいてくれる。皆が喜ぶためにクレヨンが手が汚れるのに描いてくれる。 ■いつも優しい。一緒に絵を描こうと言ったら、いいよと言う。 ■絵の描き方を教えてくれた。

(2) 研究の結果と考察 (気になる児童)

① 支援が必要な児童Aさん

Aさんは、学校生活アンケートで、4月「自分にいいところはないと思う」から10月「自分にいいところはあると思う」になった。お友だちアンケートから友だちの数は4月3人から10月13人になった。また、「あなたがこまったとき、助けてくれる人がいると思いますか」の問いに「思う」と答えるようになった。いじめについて話した頃から友達と笑顔で仲良く遊ぶ姿が見られるようになってきた。事情を知らずに友だちをかばい感情的になり、トラブルを起こすことは時々みられるが、時系列で説明すると理解でき素直に謝ることができる。Aさんの課題を意識しつつ良い所を認めていきたい。

② ある程度支援が必要な児童Bさん

Bさんは、「自分の良いところ見つけ」の学習で、「ぼくは頭がいいです。詳しく知っていることがあります。ぼくはからだがよくごきます」と書いた。特性を肯定的に捉えている様子がうかがえた。Bさんは、帰りに学童の友だちを誘っている姿が良く見られるようになった。学校生活アンケートで、4月「学校に行くのはどちらかといえば楽しいと思わない」から10月「どちらかといえば楽しいと思う」になった。お友だちアンケートから友だちの数は4月1人から10月3人になった。Bさんに話しかけると筆者に顔を向けて「はい」と言い話を聞くようになってきた。応答関係が出来つつあるようで嬉しい。

③ 通常の児童Cさん

Cさんは、学校生活アンケートで、4月「自分にいいところはないと思う」から10月「どちらかとい

えば自分にいいところはあると思う」に変容した。お友だちアンケートから友だちの数は4月4人から10月11人に増えた。好きな絵を通して、優しく教えてあげたりプレゼントしたり友達と関わり友達が増えてきた。自己肯定感も上がってきたので今後の様子を見守りたい。

支援を行いながら、気になる児童の4月から10月の変容をみると、友だちの人数が多くなり、自己肯定感が着きつつあり、自分が困った時助けてくれる友だちがいると思うようになってきている。これからも、子ども達が自分や友だちのことを知り、助け合いながらより良い関係が築けるよう支援していきたいと考える。

8. 総合考察

この2年間で見てきたことは、やはり児童にとって友達は学校生活の楽しさを左右する大きな要因の一つになっているということである。友だちづくりは、「社会の中で自分らしく生きることが出来る存在へと児童が主体的に成長する過程を支える」という生徒指導の定義（文部科学省 2022）と関連がある。この研究で自他理解を意識した取り組みや、教師の「勇気づけ」の言葉かけを意識した児童への働きかけにより次のような成果がみられた。

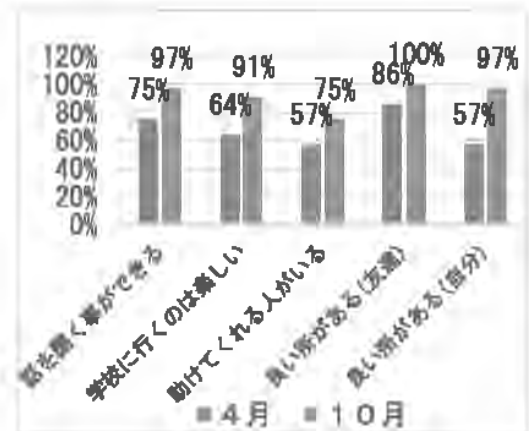


図4 学校生活アンケート

(1) 自己肯定感や他者による受容が向上し、児童相互の関係が広がりつつある（図4）。

(2) 児童と児童・児童と教師のよりよい関係づくりに変容が見られ、10月には、学級生活満足群（承認・非侵害群）が76%になった。気になる児童Aさん、Bさん、Cさんも学級生活満足群へ移動し友だち関係の改善がみられた（図5）。

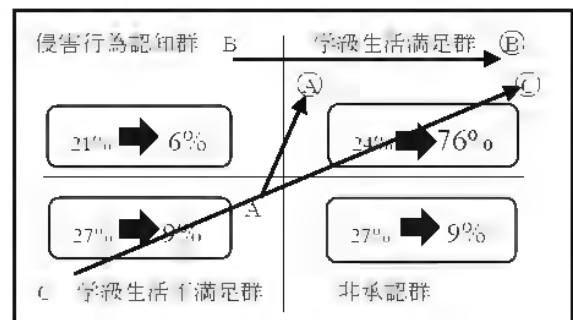


図5 QUテスト結果 (4月 → 10月への変容)

(3) 感情交流のみでなく、役割関係もリレーションづくりにより有効であり、係活動や一人一行事担当などを通して協働して活動できる児童の育成につなげることができた。

今後も自他理解を深める取組を行い、これからは児童相互に「勇気づけ」の声かけができるようにしていきたい。また次年度は低学年に加え中・高学年も学級活動に自他理解の内容を組み込んだ年間計画を作成し、校内体制で小学校6年間を見通した指導内容で計画的に児童の関係づくりを行っていきたい。

【引用文献】

國分康孝, 2018, 『構成的グループエンカウンターの理論と方法』 図書文化。
 楠凡之・丹野清彦, 2022, 『感情コントロールに苦しむ子ども 理解と対応』 高文研。
 文部科学省, 2018, 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別活動編』 東洋館出版社。
 文部科学省, 2021, 「令和 3 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要」(2022 年 11 月 28 日取得, https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf)。
 文部科学省, 2022, 「生徒指導提要」(2023 年 2 月 26 日取得, https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf)。
 野田俊介, 2017, 『アドラー心理学を語る 4 『勇気づけの方法』 創元社。
 横川和夫, 2009, 『降りていく生き方』 太郎次郎社エディタス。